

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水城

NO. 8 近畿大学の無菌室



経営学部 浦上拓也教授。



アカデミック・シアター



女性専用自習室も

ヒゲに理由あり！？

近大と聞いて「近大マグロ」より先に、故・保野健治郎教授を思い浮かべるようなら、上下水道業界のベテランにしてプロと言える人だろう。阪神・淡路大震災の被害調査において火災がなぜ起こり、どんな事態をもたらしたかについての調査報告と提言は、その後の防災に大きく活かされた。改めて弔辞を拝見すると、「水道のプロとして大活躍し…」と記述されているが、当時の水道業界としては、いわゆる主流派と目されることはなく、むしろ異端的な立場にあり、多様な管材の可能性にも言及されていたことが、今となっては非常な先見の明を持っていた人と言えるだろう。男性の平均寿命が80歳を超えた現在では、72歳での逝去はいかにも早すぎる死ではあった。

その後、近畿大学（東大阪市の本部、近鉄大阪線・長瀬駅）を訪問する機会がなかったが、ここに来て、衛生・環境工学ではない経営分野において浦上拓也教授が登場し、上下水道分野で活動していただいている。経営分野で新しい学識者の登場が求められており、浦上教授は、これに大いに応えているところである。先頃、近大における大きなイベントとして、「公益事業学会」なる学会が開催され（'17年6月10～11日）、初めて参加した。

学会の活動内容については、WEBを覗いていただくとして、驚嘆したのは、「アカデミック・シアター」の存在である。蔵書量7万2000冊、うち漫画2万2000冊。が、その前に、近大マグロの話をしなければならない。

どんな学会も1日目のパーティーが楽しみであり、出席者はその場が次に繋がる仕事ができる絶好の場である。そのように振る舞わなければ、パーティーに出席する意味はない。とは言え楽しむ材料が必要であり、それがビジネスへも繋がる。近大の場合、当然、話題は「近大マグロ」である。挨拶に立った副学長さんによると、近大マグロは高価であり、年間会費千円の公益事業学会では負担できないこと、納品されたマグロの大きさ次第で

は、当初予算を大きく上回る事態になりかねず、主催者たる浦上拓也教授が大変な費用を負担することになりかねないということを知った。そのリスク故に、今回は「近大ナマズ」が事前の案内でPRされていたが、これも都合で無く、注目は「近大ハマチ」に集まった。生き物を対象にしたビジネスはなかなか難しいようである。

近大ハマチは旨かった。余程、エサにノウハウがあるのだろうと思い訊ねたところ、「魚のエサはそれ程工夫ができる分野でもなく、どの養殖業者もエサに大した差がある訳ではない」という事だった。では、この味の差はなぜなのか？

そのパーティーで、魚と共に紹介されたのが、開設されたばかりの「アカデミック・シアター」だった。7万2000冊の蔵書も大したものだが、うち2万2000冊が漫画という紹介に驚いた。個人的な好みとしては、「クール ジャパン」とやらのアニメを漫画の領域に含めたくない気持ちが濃厚で、1950年代の貸本屋（『影』や『街』）、草創期の『少年サンデー』や『少年マガジン』、60年代の『ガロ』に象徴される劇画、さらに70年代における“全面展開”——が、我々、つまり団塊の世代にとっての「漫画」である。

建物は図書館のイメージとは、まったく別次元のもので、卑俗ながら「美しすぎる図書館」「オサレーな建物」といったところか。「こんなキレイな場所で…、我々の時代には…」という、驚嘆はあるが羨望でもなく、いまだ経験のない無菌室とはこういう空間なのではなかろうか、というのが印象だった。当世流行りの「昭和」とやらを徹底的に否定すると、こういうことになるか。「今の学生は恵まれているなあ」というよりも、「こんなキレイなところで大変だなあ」と思ってしまう。何が大変なのかは不明である。

一般の人間も利用可能とか、24時間利用可能とか、女性専用の自習室があって独自アプリをダウンロードしておくとか、個人ブースやら窓際の席を予約できるらしい。

そういう話とは別に、先日、就職説明会で、学生に公正取引委員会の仕事を紹介する企画もあったらしい。「マダロ」だけじゃないことが、よく分かった。